7 3
6479
7 上

京都帝国大学図書館

門 雅 考 ・7上 良
ワ3
6479
7

進退記 第六

飲食之部

茶之事

一 茶を煮にまして四五人の前ならば茶碗大さ茶からは煮たる湯
取て其のまゝ煮たる湯を其のまゝ茶碗のもとへ入て茶碗ともに
なるほど右一人小茶碗からいに煮たる湯を入て右
の大さの前へ出て茶碗を拭てのむ一人宗旦流にも
あるいは茶碗にて茶のむ一人の御家にては
茶碗ともに茶を入て右の大さの前へ出て宗旦流といたすのも
よろしけれども茶碗にひろけてのもの方よろしけれども
こゝにて宗旦流の指と御る事は此奥に
る事に取の時ともに人の前へ出て茶碗の

かつて下ゝ流三面ひの人百て春ゝまて〳〵ゆるゝ又寺百りて
ゝ茶れとて人ゝ礼とアてのもひ中あり梅ゝ花ゝ咲ゝ
ゝる〳〵其時い句の花〳〵礼とアのもひ下〳〵又世ゝ戻ゝ人ゝ数ゝ〳〵句
ゝ花を取ゝ〳〵中ゝ時我より下ゝ人ゝ礼とアて春ゝ〳〵ゝ中ゝ〳〵
のもひ時候ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

一　盃のとき（略）

主人中人の盃のとき酒盃いてきて
て出ては（て）梅酒を出し（略）
きてとりかたづけて出て（略）
出盃出ては（すゝ）きもとも出て
出ては（て）てもとも出たる流の者（者）は
組出居者出るとの盃を出す

盃とゝきてうの事

一　主人中人の前にて侍衆の盃といふを貴人
の方へ出ては（て）出すなり　親戚中の盃外人の前へ出すなり
主人貴人の前にて（略）ゝ出ては

盃酒と云事

一　前の肴をかゝ中人の盃とさゝしとて酒とて我出たる盃さけて更
酒にして酒とかるゝ時盃とるゝ（略）
たるとて盃の上にあるゝ（略）
酒一上（略）る事なるとゝ（略）
盃とて酒とうけさせる中人の肴かゝてゝ
忘れとして中部と心得なきゝ　江雲内かる部の江雲は有けり
今かゝはたゝひとゝ如も盃とあけ
して拾るもあけ（略）
の肴とゝ拾ゝ時ゝ中ゝ人
此事ゝ家ゝ部ゝ（略）

肴流事

一　主人貴人（略）肴とゝ時ゝ盃とゝ（略）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一

沖通りめしの事

沖通りめしの事

一常式内

ことゝゝ神ゝゝゝ礼ゝゝ

なとの時ゝ式礼ゝゝ

あ四ゝ拍ゝゝ

さゝゝゝゝゝ

山部のもとゝゝ

たゝゝ

ゝゝ

ゝゝ

[illegible]

一　沖流之儀の事

沖流の儀は通りの事ゆえ[illegible]

[illegible]

[illegible]

てきたの時前に出て三つ重ねて主人の酒盛の時に随分たくさんのことを申上げて付と懐中して今一盃
呑申

三つ重呑様の事　付四陣帰陣三つ重呑様の事

三つ重式三献の事肴ハ一ツ宛と申ハ是を初て三ツ重と呑て三ツ重ハ式三献の事肴ハ一ツ宛と申ハ是を初て三ツ重と呑て三ツ重ハ
はじめたるとなんて也肴と申ハ三ツ重ひたるまん中
ゆへ肴と申て三ツ重のとなりにたてて肴ハ三ツ重ハ
三献の肴ハ一ツ宛と申て呑ハ一ツ宛と呑るかいらけの折敷の上の
行儀ハ重ハ一ツ宛又中の五寸ハ三ツ宛と入さきのゆへ三ツ宛ハ
てきたからけの前のゆへとらけの上ハ三ツ宛ハ一ツ宛かりの心

第ハ三ツ宛と入さきゆへ呑て其かいらけ三ツのゆへ折
敷の三ツ宛ハ三ツ宛ハ三ツ宛のかいらけを三ツ宛ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛
ハ三ツ宛の肴ハ一ツ宛と呑て呑ハ一ツ宛と呑ハ一ツ宛

[illegible]

一

式三献行ていうちこうてさいていうとこ[illegible]式三献のこと[illegible]

[illegible]

式三献右松の[illegible]

[illegible]

一

一番ゟ[illegible]人の[illegible]三献めゟ[illegible]人ずつ[illegible]

[illegible]

[illegible]

一つの盃のうへに前のごとく次第〳〵に重ねて

一基の盃を吾れ〳〵の手〳〵に持て酒のうへたちかゝるを互人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の人数を出酒肴にて上戸あまたあるとき、からかさと夜てかさ、我
年上座にて、あるて、夜のかさ、ねてたり、中の上戸にてはつてもさてのこと
是かいらけをつかまつる、我のこと、たる酒肴を、ねたる事、称
ある程ふるまいとも、首をうつ程、からい、一口の上戸
ありて、拾て、西方捨て、教養、我て、まつ、又、たり、山て、上戸ある
くるてもよろしき時分もこのすりの、是、山事、山、は、はいまて
ひとてたり、山、て、上戸、ならて、いまて、さ、行て、
和尚、ともと、人の、安乃、行の事、右のわ、公家、れ、よ、九の
ふ、たり、右のもの、上戸、なと、ひ、こ、ひ、ま、て、のこて、行の
ひ、ま、ふ、一、ひ、ひ、て、ねて、五、つ、て、と、作、山、とも、武家、は
反、れ、と、ま、ね、信、ま、ふ、と、ま、つ、ま、ま、ま、ま、
また、かいらけに、是、酒、捨る事

また、上戸に酒、とめ、ま、る事、我、吾、ら、時、ロ、の、酒、ま、る、西、と、の、ま、
た、る、酒、ま、と、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、
ま、ま、ま、ま

一 神酒のむ事

酒のはじめにのりてのみはじめ酒をたてまつりて
[illegible]て神酒をあがりて酒をのむ事

芝居にて酒のむ事

一 勅使院宣使等の芝居にて酒のむ事
[illegible]
事芝居にてかのもの[illegible]
[illegible]
のとりかたにて[illegible]
けわしきことなる事あるべからず
[illegible]酒のむ事

一 ゆのみにて酒をいる事あらば肴と酒あるべ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

一 [illegible]酒の時盃をとりかへさせたる人の盃をとらんとしてとりかへさせたる人の盃をとりかへ[illegible]人のとりかへさせたる人の盃をとりかへ[illegible]人の盃をとりかへ[illegible]人の盃をとりかへ[illegible]

祝ひ事の会ならば貴人をのけてひざを立てのむべし又貴
人のけとてひざを立てのむべし是ハ客人なるゆへ客人
を上へなすべし

一 祝儀ある者共寄集りて事祝の会をなす人ようて新郎
あるべし又客人なりとも何とやらん仮令ようもちて上手ぶり
衆客ようきく人なりとも可給ハ祝儀ハ新郎ばかり
也衆客ありてもあるべし上ゼ女房のけて人のことひまこそ
なれ

一 祝儀ある者共寄集りて事祝の会をなす人ようて新郎
せんとて貴人なりとたとへ右のごとくのものあるべ
のけて右のごとくひざを立てのむべし

一 祝儀ある者共寄集りて事祝の会をなす人ようて新郎
ありて客人なりとも来客ハ必ずしてはかいまゐる則
ちるべし但客人のあるときそこのうるハ必ずしてはかいまゐる則

客人持来の酒の事

一客人持来の酒といへども初献より亭主盃を客人へ呑とて客人へ指出すべし亭主盃を初めらるべ命ずべし客人へ呑初めたる時いかなるものも亭主呑初へ

一客人へ呑初めたる時亭主盃を客人へ呑初へ

一客人へ呑初めたる時亭主盃を客人へ呑初へ

一客人へ呑初めたる時亭主盃を客人へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 神酒花の事

神酒花の事、神酒とも云ふ、[illegible]
[illegible]

一 吸物喰花の事

吸物喰花とは、[illegible]
[illegible]

一 雪見の肴と云ひ花の事

雪見の肴とは、[illegible]
[illegible]

一 湯漬け喰花の事

湯漬けは、[illegible]
[illegible]

ゆあ〜椀にうけて椀に汁をいれ人数を汁にてしてねぎを
百て喰て湯にてけい三番喰て汁湯をかるとらふ椀をとりて
ヨとふあるさる事也右のかく湯をかるとらふ椀をとりて
のあるあるとこと仮のにこ入てねたのまえよ者
こあるとしけるまゝふ事老人ハ若者ハ人ハけるまゝふへ
からハこゝろうとふて一度再度ハいかゝとも心のまゝにあること仮
人の相伴のらい上座の人ハ人数合へて湯つけるかうとてこひまて湯
仮椀をまゝこふあるとこ仮椀をまゝ人ハとふ人ハ仮椀をまゝ
ハかよりもまあるとこふて一仮椀をまゝ人ハ仮椀をまゝ
ハこゝろあること

一仮こゝ椀の事

一仮こゝ椀を者ハて後仮椀を百へ一あるまゝ一度者と仮椀と

者ハふんくるまゝ也ハ仮ハ二ツ者ハ喰て初たのまゝ中椀の大
けて者けこひまゝ一ハとこ入初ハ者ハとふへ一あるまゝ者ハ
初ハ者ハ仮ハ中椀のまゝ者ハ者ハ者ハ
初ハ者ハ二の椀のまゝ者ハ者ハ者ハ
百て仮のまゝ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
まゝて者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
者ハ二の椀のまゝ者ハ者ハ者ハ者ハ
者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ
椀へうつるまゝ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ者ハ

こまゝふ弁慶ものの二杯とつゞけ食せもてゝ食てゝ箸をもて手
つゝとこてさゝとこひくゝもて外のきいにたるきゝを喰ゝ けはやたて
り付や喰てさゝにつゝ大はけもうゝわけもうゝ大はけ
うる事をもてゝ手ゝ俵をつりあゝてゝさゝとこひてゝ
けはても喰ゝ 又必俵をもてゝこゝのけはをゝ事を食ゝ
ハ者ゝ めらゝ もゝ者ゝ人のゝ
の者ゝ汁をゝ吸ふ事をもゝ きゝうゝ 鶏の骨を四ひ鶏のけんを
二ひ さゝ四のゝ 椀をもて二ひ 椀の中をもてゝ
ひもてゝ事ゝ 雑事ゝ 常椀のあをゝ 椀をもてゝ
みの者ゝ あをゝ 取てゝ ゝ 椀をゝ事ゝ ゝ
たゝう 椀をゝ ゝ ゝ
あゝ二ゝ ゝ ゝ

いゝ の ゝ ゝ ゝ

三人の和尚を受戒とる事ゝ
おなじく紫の服を着ゝ
汁をとりけてこふへ
事武家より中船入ハ二の
とる事をへむらを出家ハ
ゝけ日事ハ
ゝ人とりのゝ
ゝ
ゝ

はせ参着をとゝのへ〳〵まてとゝまる事いつるまのもとつゝ
給仕のてゝ順番のるまあり同心
して別して雪駄をゝ事也

一 藏様ゝこゝ拵ゝ事
如何ゝこの刀めなたるゝ着をとゝのへ〳〵まてとゝまゝそりめおゝ
ゝ事のけてゝまゝりゝふゝ〳〵

一 さてゝこゝ拵のまゝ
さてゝゝ拵の右の角ゝ切て至たゝ敵に逆と合せん
逆ゝとゝとゝこゝ山とゝしたらんゝの外ゝ切がたるゝ一人の
ゝ拵ゝ逆ゝ心とあゝこゝらをゝ逆ゝ逆ゝ鎧のゝ逆ゝ
ゝ事

一 ゝのゝとゝゝ拵ゝ逆ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ

中をゝ逆ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵ゝ拵

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]

一 人の相伴をする事

一 [illegible]

仮名ばかりにてまた人にてひさこの花おらんとこそ
とのたまへば時平よりうへ仮名書とかれぬ事なれば
仮名やうに書をとるようけをうけ渡をとるとの
つかさとのようにてうらにつかはす中納言盃の時と上にのうへ
に酒とうけて次第にまいりたまへうゆ盃をあげらるるを
ふんでまいるのをうけてまいりたまへとうんをすゆるをまいる
の事也内々にてはことあるつかまつりまいるのまいる
はそれのうへの時長殿をはじめらるるまいる
式部にてまいるのつかまつりたまへとうんをすゆるを
行事とまいるをまいりたまへやうにまいるのはいかにすべき
さまにまいりたまへのもとにまいりたまへてうんをもつて
うけをつかまつりたまへ人のうへのひさこのまいりたまへとうんの事
なりよりの

つかまつりたまへの時日月花をおりたまへ事あらん枝のふりを
てをまいりたまへてまいりたまへ二三の花をうけてまいる
枝をおりてまいりたまへ二枝よりおりたまへ
の時まいりたまへ仰らるるまいる着ものをまいる
はをおりたまへまいりたまへ人花をおりたまへ
人仮名書にかれぬ我も仮名とてもまいりたまへ
とてまいりたまへけとまいりたまへ我もけを
とてまいりたまへけをまいる

脂燭事

一まいりの脂燭をまいりたまへてまいりたまへ
たまへらるる事なりまいりたまへ人をまいりたまへ
の人の脂燭の人をまいりたまへ人をまいりたまへ
まいりたまへて仮名の人をまいりたまへ人をまいりたまへ

碁の時に花を出さぬこと

碁をあげさせる事

一あるの流をくの所にてこの碁の時のはしらをおかるゝ事
碁をあげさせてあげさせる事一つゝ
いたる一又客人の人我家に来る時に碁をあげて
手まず碁の人をとらせない碁盤をもてくる人
碁をあげさせる事

碁をとる事

一さしをんを碁の時仮にもものを書紙
をとらせうとひるをとらせて後ひるをとること

碁の時に茶をとること

一碁の時に食事茶をとる時
碁をとらせる事
碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事
碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事
碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事
碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事

碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事

碁の時に食事をとる時
碁をとらせる事

はなきたらつゝとを一切らすくわて一切喰ひ今は喰そて
捨る一切いそんぬまゝ肴ようとて酒とゝ思ふる色切
そのそわりまして人まらつる事四ゆまゝつらに
風かおきらす椀盤ようとも切ゆりまさす事みをしらるう
うつをを喰事宮殿よりくゝ椀盤そて出をたそうつをを
はまゝ鳥椀そて盤を高して喰ひ中人上方をとの内者
ようつをを喰ひ人のもをて行られを
そとをそてそををを出事後悪ある事やその風あしくとも
皆とふをゝ椀盤ようとをとゝ人のもをて行をら残さ
すとふををあり

盤ようとも切事

一盤ようとも切事宮殿の内ゝ祝ふ

あゝ椀盤あゝ切て椀の分たるをの一切とハそ人よりあつまるあう
又口紙のそ人殿宮中の肴ようとををゝあらをるはハ春の
ゆゝ切て椀の分たる方の切ようを椀盤ようとををゝ切て刀を椀ふ
そゝて女ゝ椀を割ようとあゝ一切ハ皆中椀たる
て切色盤ようと盤ようとも切て切椀の分たるを一切ゝて
らを一ゝ人ゝ切ゝ切ゝ切ゝ

熟椀を喰事

一三ゝ〇〇ゝ〇〇ゝ〇〇

核のあるものを人の前にて喰ふ

一さくらんぼ人の前にてはしにて喰てたのもの
ゆすらうめ人の前にてはしにて喰てたのもの
ぶどうを喰てさくらんぼとゆすらうめとぶどうとを
皆々たべてさくらんぼ人の前にて喰ひて人の前にて核を
はきたるものなり

雑煮喰ひの事

一雑煮は上意にてとりあつかひ候ひこと
くはあとにてくはせ候ひ
ぬれいこふからに着てひ一つとりあつかひ候
ぬる雑煮

候ひ食事

一候ひ食事二つ重ねて有りたるらんにてたのもおれる候ひ
食一人着てとりあつかひ候ひ
たるあての一文字ふるる格ふ二口つ喰一こと
切とい歯のあて用の時乃ぬ格ふ二口ふ
候ひ候いらきてとりあつかひ
候ひ候いらきてとりあつかひ

一赤飯喰事

赤飯とび着ものとりあつかひ喰一右のもの
ものとりあつかひ着
ものとりあつかひ喰一四合八分着ものとりあつかひ
しき事こいりのもの人とりあつかひ

一粥とりあつかひ事

一うるつけをうとる事ハはふ粥とり
りのもの食事別の候ふ
年ものとりあつかひ

粉喰言

一 ちまさて喰事あのようとて荒のうちの方喰て荒のうちの方ようとくあ面うこ荒の事の方猶とたらおりとて
たて人とあらうとうも皆むきてうら粉とそ出らとの事也生言
但今とはとむきて刀用たけて出らとこ一面ていとあらとて所
荒のとうを出て出らとうを也一面むきて出たらい強くいとまを出
たて男はとて荒のうちの方とあ一けむを強くて出て一見も
一面むを也但宮敬り人なるらい三ツいうもむきて出て一人とは口用
一面なとあらする事あとて人ふうとて時とあもてあらて

慢頭喰れ乃事

一 ひんちう喰れとあるこうけて出て汁をあるけ事人乃
汁あはるらい毎とたからけ汁をあて汁をあて手人の方ふて

ハ行目おとて文一一為ハけと清酒一たらい著とあるこ行こ
一面粉とけハ人一あさあるこ人なるこい粉とへ人なるら
すあけけと清酒粉とて著粉あらうまんちうと一つあるけま
ハうこの中のこのこれとこあやうまあるとこ思ものこてたれた
るあらうとちとあるあれたらやとたん面酒こてあるこい著を
おとこ出たのひとそまんちうとちあへ一とを成人ひとそて
今来ハんと思て前とたに出とうを人行こて面あけたの
具行酒こてあるけ粉とあの喰ちらあ一位
老人なこ二ちとこて酒一文老人ハうこらこて面ちうとふ
酒一文とこあるも一面後こて酒とあ一てうこう人あるか
こ文人なこうけとあ酒のあるこ人なるこ
ちこうこ粉のあらけの粉あるうを百人こて酒人とあ

[illegible]

一 出茶作法の付説心得抜のこと

出茶作法（サセ）の付説心得抜のこと

[illegible]

[illegible]

一 出茶新しく二人抜のこと

出茶新しく二人抜のこと

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なる面（おもて）のさまもいとをかしくて二枚あの板のあなとにひきて
たちて一枚ののあさ板のまるなるこまにて〇をまへ一つ打ぎ二枚ハとも
ぬきて〇をまへ一つ打ぎ二枚ハとも　強とて一ツ屋てゐい
やうきこゑ（声）ハ　ぬきうちハ　ぬきうちハ　ぬきうちハ　ぬきうちハ
しく　新敷　たてひとらすとも　人の　真似　とひとらすとも　ま
へ　くぬるもの　ものもの　ひとつ　ぬりたるもの　ものもの　ぬ
ぬきて　ものの　ものとも　ぬきて　ぬきて　ぬきて　ぬきて　ぬきて
ぬきて　ぬきて　ぬきて

一 三宝（サンホウセン）の中の草

まんちうまんも蓼（カラ）の葉の色屋中にても用ゆ一献にまいる酒ともまん
ちうの葉色一所にかんそうの二部の色にて葉にて作りたるうんも色く
清て葉の色にて作りて一番にて三番にてとりて人の葉にとり
て前よりぬきてうすくなる色黄色にて人の示るあり也黄と合てたみ折
葉にいとのうへも白にてもうごうこひ花に葉にてかんをとりたる
かうらけにて花にけそれも色に汁にうけて紅花とうんを黄色にうん
さうたるかうらけにたるのうへにこのうへの内高さの山に強して
河うこりの山をこりして冷こ紅花とあけ侍に黄にて三番にうらこび
してのけさをれもいしたるとへしたるとへ入をうらせしてある色黄色へ
黄色にて三番にまんちうのかう

草の冷花紅花にうれる事

一 草の冷花紅花にうこをれるいこてたのもの百姓にやうこ おか
かうこふ百姓 耕こるとてのをいるまて百姓にをむきてくふて
そこあるあいなをそこ花をてとふて 草のこ人花を紅花のえ
を黄花にてたりて こをもとをあるこ花にたりかうこけく
けりかいこ色色又黄色にひちきにまあてたりかうこ紅こうら
花のまをうこてたりこ花にたりやこ情事
を

一 飲食に心にかこ

人の行にまかりこ合の成我汁にて ゆこ三きこめかたるこて人
のかてもしてこてるしいんこ走りとりてるすあと出と
喰に酒にものの日のまに言語道の此奥の事こいろふも花にて
喰日にも酒日にもの日のとそなる時に酒にものあるもこふ

清盛てゝ言てゝあ佐のあてゝ生ともとらぬまゝよのたてゝの礼を
言らぬてゝ生ともとらぬてゝ礼のこゝ礼のこゝ恨ふこゝ礼
のこゝ恨ふ人のとてゝ礼のこゝ礼のこゝ礼のこゝ礼のこゝ
よ礼人こゝ礼こゝ礼とこゝ礼とこゝ礼とこゝ礼とこゝ礼
ニこゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼
ゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼
ゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼
ゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼こゝ礼

一人の恋ばかりいかとのあるとよりてもとて古よりの恋ばかりとのあ
なきとていきたふまるひ事ゝ人の目ばかり
事のたきとのあるとこゝ我身よりとみ我身ばかりふく

みたりゝ我身ゝ人ゝ心ゝ恋ゝ恋ゝ出て人の恋
辰ふまゝ人のふゝ我ゝ我身のゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ恋ゝ
事ゝきとゝ人ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ
ゝちゝゝけてのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ辰ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て人の目ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
前ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
位ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世間の人はいかなる心にて侍るぞ心にかなはぬ事のみ
侍らんとて世をいとはんとすれば我家をさすらへの
しるべとなし我家をすてゝ山にこもらんとすれば
のがれがたき世の中にて侍るなり
ある人の言はく世を心にまかせずして家のたゝ
ら我身ばかりにてすまんとすれば
ある人の言はく世を捨て山にこもるとも
くはなれぬ物は心なり
世をのがれ山にこもるとも心よりはなれぬ
なり
ある人の言はく世を捨て山にこもるとも
あらはれて事をなすべし
ある人の言はく人の家にあるも事
人のきらふ事人のそしる事なり
ある人の言はく世をのがれ山にこもるとも
心にまかせぬ世なれば也

進退記終

右進退記七帖以家伝仍此原文謹写傳
必〻他見不可為作案於為如件

伊勢守助

貞春

寛政十年戊午四月十日

若州花十郎殿

寛政十年戊午二月十日写終　吉川兼雄本記家

天保四年癸巳八月十日写終　少将権右少弁藤原成之